

P1-3 機能面への固執から、作業中心の介入により、活動的な生活を再構築できた症例

○園田 志保(OT), 石黒 望(OT)

医療法人恒仁会 近江温泉病院

Key word : 上肢機能, 作業, 活動

【はじめに】回復期リハビリテーションにおいて、改善した機能を対象者にとって意味のある活動に結びつけることは作業療法士の役割の1つである。その為に、CI療法の1つのコンポーネントと位置づけられる transfer package (以下、TP)による行動変容が推奨される。今回、麻痺手の機能向上への固執が強かった症例に対して、TPを参考に実生活での作業中心の介入を行う中で、主体性が引き出され、生活へと目を向け、結果的に機能改善も認めた症例を経験したため、以下に報告する。尚、発表に関して本人の同意を得、当院倫理委員会の承認を得ている。

【症例紹介】60歳代女性、脳卒中右片麻痺。発症+25日で回復期病棟へ転院し、翌日より作業療法開始となった。

【CL中心の遂行文脈の確立】開始時情報を、OTIPMの10側面で整理。環境：夫と息子の3人暮らし。役割：長年畑仕事に従事。家事全般を担い料理を作る。動機：上肢の麻痺を治したい思いを強く訴える。課題：COPMは①包丁が使える ②金魚の世話をする ③旅行に行く ④1人でお風呂に入る ⑤お箸が使えるが挙がり、遂行度③5/10, ③以外1/10, 満足度は全て1/10。文化・社会：手芸などの創作活動、金魚や花の世話を大事にする。制度：介護保険未申請。心身機能：BRS右上肢IV-手指Ⅲ-下肢VI, FMA50点, MAL使用頻度1.0, 動作の質1.07, STEF右16点, FIM93点, 入浴以外ADLほぼ自立。時間：病前は、家事、手芸、金魚や花の世話など活動的な生活。受傷後は、リハ中心の生活。適応：訓練意欲は高い。

【作業遂行観察】生活行為での右手の使用はほとんどされていない。入浴時洗体では、左手でタオルを持ち実施するが、左手や背部に洗い残しがあり、右手でタオルを掴めず介助を要す。浴室室内歩行、浴槽への跨ぎ動作では左手で手すりを持ち、ふらつきなく支援は要しない。

【介入計画・経過】

第Ⅰ期：入浴動作指導にて、タオルへの工夫の下、麻痺側参加での動作指導にて自立を図った。CI療法コ

ンセプトによる課題指向型アプローチにてOT時間以外にも自主訓練を指導し、習慣化を図った。また、TPを参考に汎化を目指し麻痺手の使用チェックリストを作成し、毎日OT開始時にフィードバックし、課題の段階づけを指導。

第Ⅱ期：OT室にてネット手芸に興味を示されるも「手が動かないからできない。」と訴えられた。環境設定により右手でネットを持ち左手で編む提案により「これならできそう。」と、自身からリハの合間や夕食後に自室でも取り組まれ、右手の使用機会がさらに向上した。以降より、自身でできる作業を自ら探し、提案するなど主体性が向上。創作活動の中でも右手の使用場面に、段階付けを実施。また、自助具箸を使用して食事が可能となる。

第Ⅲ期：「包丁が使えるようになる」に対して調理訓練を積極的に開始。模擬練習から始め、野菜の硬さなど段階付けを図り進めた。また自宅外出訓練で、実際に調理や金魚の世話を遂行して頂き、帰院後にチェックリストにて確認を行い、課題を明確にした。退院後に向けて、自宅でできるセルフメニューを作成し、申し送りを行った。

【最終評価】COPMは遂行スコアの変化5.2, 満足スコアの変化5と向上。BRS右上肢V-手指-V-下肢VI, FMA56点, MAL使用頻度3.3, 動作の質2.8, STEF68点, FIM120点, 食事, 整容, 入浴, 更衣にて右手の参加が見られるようになった。

【考察】症例は、TPなど参考にした介入により、改善している機能を見逃さず、適切な難易度で作業中心の介入を行うことで、日常へと汎化が図られた。また症例にとって意味のある活動に従事したことで、「できる」という作業有能性を高めていき、主体性が生まれ、活動的な生活を再構築できたと考える。